

集合！

山田志穂

登場人物

千尋
長女

いちか
次女

凜太郎
長男／末っ子

古いアパートの一室。狭い和室。下手にふすまがある。
部屋の中央には自転車が置いてある。

上手より男が登場。凧太郎。

凧太郎 ただいま…えつ、

自転車と対峙する凧太郎。

凧太郎 ねえ。何これ。

返事がない。部屋の中をうろつく。

下手から物音。凧太郎、静止。

ゆっくりとふすまに近づく。

と、上手より女が登場。いちか。
背を向ける凧太郎に声をかける。

いちか 凧太郎？

凧太郎 うおお！

いちか おお、何。

凧太郎 いや、ちょっと、びっくり。

いちか なんて。

凧太郎 おかえり。

いちか うん。ただいま。

凧太郎 久しぶり。元気？

いちか ー。普通かなー。

いちか、部屋の中を見回し

いちか お母さんは？

凧太郎 えっと、いない。まだ買い物かな。

いちか お姉ちゃんも一緒に。

凧太郎 いや、ちーちゃんはあるみたいだよ。

いちか あ、そう。

凧太郎 (下手を指し) なんか、音。したから。

いちか 起こすか。

凧太郎 まだいいよ。早いし。

いちか 早いって…もう十時だよ。間に合うの。

凜太郎 まだいい。かわいいそうだし。

いちか かわいいそう？

凜太郎 疲れてるんでしょ。ギリギリまで寝かせてあげようよ。

せっかくの土曜日。

いちか いやいや。この人、毎日が日曜日だから。

凜太郎 どういうこと。

いちか え？

凜太郎 もしかして、辞めたの仕事。

いちか あれ。これ内緒だったのかな。

凜太郎 いつ。

いちか 五月とか。

凜太郎 半年も前じゃん。

いちか そうなるね。

凜太郎 コロナのせいで。

いちか ううん。

凜太郎 違うんだ。

いちか あれ。これほんと内緒だったかも。

凜太郎 母さん知ってるの。

いちか そりゃそうだ。一緒に住んでるんだから。

凜太郎 どうして俺だけ知らないの。

いちか 知らんよそんなの。

凜太郎 言っつてよ。

いちか 知ってると思うでしょ普通。近くに住んでるんだしき。

凜太郎 俺ここ来てないもん全然。

いちか ねえ。私に聞いたって言わないでよ。

凜太郎 えー

いちか、自転車に触る。

いちか で。何これ。

凜太郎 チャリ。

いちか 凜太郎の？

凜太郎 いっちゃんのじゃないの？

いちか 違うよ。

凜太郎 家出る時に置いてったやつかと思ってた。

いちか 私の向こう持ってたもん。

凜太郎 そうだっけ。

いちか 大将君が使うって言うから。

凜太郎 タイショー君って誰。

いちか そんな時の彼氏。就職してしばらくあつちで一緒に住んだ。

凜太郎 ああ、分かった。大学の時の、

いちか そうそう。

凜太郎 トイレのスリッパで家中歩く人だ。

いちか ありえないよね。

凜太郎 それだけでフラれた人だ。
いちか 別にそれだけじゃないけどさ。
凜太郎 もう会ってないの。
いちか うん。全然。だってもう三、四年前の話だよ。
凜太郎 帰ってきたら。
いちか え。
凜太郎 もう帰ってきたらいいじゃん。
いちか なんで。
凜太郎 タイショ―君に付いてってそっちで就職したんでしょ。
いちか そうだよ。
凜太郎 なら、もう居る理由ないじゃん。別れてるんだから。
いちか 帰ってくる理由もないよ。
凜太郎 あるよ。
いちか ないよ。
凜太郎 あるじゃん色々。このご時世。
いちか 何よ。
凜太郎 近くに住んでる方がいろいろと安心。心配だもん東京。
いちか そんなの。どこ住んでも一緒だよ。
凜太郎 一緒じゃないよ。また増えてきてるじゃん。感染者。
いちか まあ。
凜太郎 やっぱ人の往来激しいんだから都会は。いろんな人来てさ。
いちか マナー悪い人も多いんでしょ。
いちか はは。ないない。みんなちゃんとマスクしてる。

凜太郎 今回だってやっと帰って来れたでしょ。
いちか お盆帰れなかったからね。
凜太郎 半年以上会ってなかったんだよ。家族なのに。
いちか 凜太郎だって一緒でしょ。
凜太郎 どういうこと。
いちか 近くに住んでたってさ。全然ここ来てないんでしょ。
凜太郎 それは、
いちか だからお姉ちゃんの近況も知らないで。
凜太郎 まあ。確かに。
いちか せっかく近くに住んでるんだからさ。もっと気にかけてよ。
凜太郎 気にしてるよちゃんと。だから今日これ企画したんだから。
いちか そうね。これは良いアイデア。
凜太郎 でしょ。ほら。俺だってちゃんと考えてる。
いちか そうだねえ。えらいえらい。(凜太郎の頭を撫でようとする)
凜太郎 ちよっと、何。やめてよ(振り払う)。
いちか 優しいね凜ちゃんは(また撫でようとする)。
凜太郎 うわ、ちよ、やめ、…あ！

慌てて距離をとる凜太郎。

凜太郎 …ねえ。手洗った？

いちか あ?…どうだったかな。

凧太郎 ちよつと!

いちか うそうそ。洗った洗った(笑う)

凧太郎 本当?

いちか ほんとほんと。

凧太郎 じゃあ匂い嗅がせてよ。

いちか 何それ気持ち悪い。

凧太郎 違うよそうじゃなくて、石鹸の匂いがさ、

いちか 凧ちゃんの変態。昔はそんなじゃなかったのに。

凧太郎 どういうこと。

いちか 綺麗とか汚いとか全然気にしなかったくせに。道路に落ち

てたガム拾って食べようとしてたの、私知ってるんだから。

凧太郎 そんなの子ども時の話でしょ!

いちか 修学旅行でパンツの替え持ってたの忘れて、四日間ずっと

同じパンツ履いてたくせに。

凧太郎 なんでそれ知って…もういいから早く(嗅がせて)

飛び掛かる凧太郎。

いちか、それを軽やかに交わし

いちか あ!これ邪魔じゃない。このチャリ。邪魔だよね。

凧太郎 えっ

いちか セツティングしよ。ね。時間。ほら。早く。

凧太郎 ええ…

いちか、自転車を移動しようとする。もたつく。

凧太郎、見かねて

凧太郎 いいよ。俺やるよ。

いちか お。サンキュー。

凧太郎 とりあえず壁に寄せとけばいいよね?

いちか いいんじゃない。

自転車を眺める二人。

凧太郎 ちーちゃんのかな。

いちか かな。駐輪場に置いときやいいのに。

凧太郎 うん…

いちか なんでわざわざ部屋の中に、

凧太郎 (小声) なんで辞めたの。

いちか え？

凧太郎 (小声) ちーちゃん。仕事。

いちか あー。なんか、パワハラ？

凧太郎 パワハラ！？

いちか 声でかいって。

凧太郎 あ、(下手を気にする) ごめん。

いちかに近寄る凧太郎。

いちか え。何。

凧太郎 いや、だからこっそり。

いちか 近いよ。

凧太郎 え。

いちか 保ってよ。ソーシャルディスタンス。

凧太郎 えー。さっき散々、撫でたり触ったり(してきたくせに)

いちか (無視して) 2メートル。ほら。

凧太郎 …手洗ってないくせに。

いちか だから。洗ったってば。

二人、距離を開けて座るが、

いちか 近い…

凧太郎 近いね。

いちか 狭い。

凧太郎 狭いね。

いちか 狭いわ。この家。

凧太郎 ていうかチャリでしょ。

いちか あ、そうか。チャリの存在感。

凧太郎 圧迫感。あるよね。

いちか なんか落ち着かないなあ…

落ち着かない二人。一応、声を抑えて

いちか 上司がさ、

凧太郎 うん。

いちか かなり厳しい人だったらしくて。

凧太郎 ああ…怒られて

いちか いや、お姉ちゃんは気に入られてたらしいよ。

凧太郎 じゃあどうして。

いちか 同じグループの人にめちゃくちゃ仕事できない人がいて。毎日怒られてて。

凧太郎 …うん。

いちか もう、むったくたに怒られてて。お姉ちゃんの横でね。

凜太郎 うん。

いちか で、その怒鳴り声で病んだみたいなこと言ってた。

凜太郎 ちーちゃんが。

いちか そう。

凜太郎 へえ。

いちか それ聞いた時、腹立ってさあ。

凜太郎 パワハラってねえ。

いちか まあ上司も上司だけどさ。その同僚。

凜太郎 え、

いちか 仕事できないやつと一緒にあったのが不幸っていうかさ。

言葉が出なくなる凜太郎。

凜太郎 ……ってる、

いちか え？

凜太郎 と、思う。

いちか 何。

凜太郎 ……

いちか ねえ。何。聞こえなかった。

答えない。

いちか 凜太郎？

と、物音。隣の部屋からである。

いちか だって毎日同じことで怒られてたらしいよ。毎日だよ毎日。

凜太郎 ……

いちか 学習能力なさすぎだって。

凜太郎 ……

いちか それでお姉ちゃんが辞めるってのもなんか違うしき。

凜太郎 ……

いちか 周りに迷惑かけてるって分かんないのかな。

いちか ねえ。起こそうよ、そろそろ。

凜太郎 まだ治ってないのかな。

いちか ……ん。

凜太郎 しんどいのかな。こんなずっと寝て。

いちか ないない。元気だよ。

凜太郎 へ。そうなの。

いちか 昼夜逆転してるだけ。毎日夜遅くまでゲームしてるから。
凜太郎 ゲーム。
いちか ナルトって漫画あったでしょ。
凜太郎 忍者の。
いちか そうそう。あれのスマホゲーム。
凜太郎 懐かしい。俺好きだった。
いちか 今はナルトの息子が出てくるらしいよ。ボルトっていう。
凜太郎 詳しいね。
いちか お姉ちゃんがね。めちゃくちゃ好きなの。ツイッターそれ
ばっかだもん。
凜太郎 えっ、
いちか 私ナルトって、最初の1,2巻しか読んでないのにさ。今の
登場人物ほとんど覚えちゃったよ。お姉ちゃんのせいで。
凜太郎 ツイッター、
いちか なんかほら、公式があげたやつりツイートするとアイテム
もらえたり(するんでしょ)
凜太郎 やってんの。
いちか あ？
凜太郎 ツイッター。
いちか やってるよ。
凜太郎 うそ。知らなかった。
いちか 言ってるじゃないもん。
凜太郎 言ってるよ。

いちか ツイッター始めましたって？言わないよ普通。家族に。
凜太郎 でもちーちゃんとながってる。
いちか フォローされたから。
凜太郎 ずるい。
いちか ずるい？(笑う)
凜太郎 俺だけ仲間外れにして。
いちか はは。してないよ別に。
凜太郎 なんて名前で登録してるの。
いちか いいよ見なくて。
凜太郎 いっちゃんのはいい。ちーちゃんの教えてよ。
いちか なんて私のはいいの。
凜太郎 なんか想像つくから。
いちか お姉ちゃんのも見なくていいって。あの人ゲームのこと
しかつぶやかないから。
凜太郎 えー。
いちか 夜中の二時三時に、ばーって連投。
凜太郎 遅。
いちか 楽しそうにしてるよ。色気ないけど。
凜太郎 彼氏いないのかな。
いちか いるわけないじゃん。いたことないでしょ。

物音。

凜太郎 あ。

いちか さすがに起きたか。

凜太郎 (隣に向かつて) ちーちゃん？

いちか なんか喉乾かない？お茶あるかな。

いちか、上手にハケる。

凜太郎、ふすまを開ける。

静止。しばらく。

いちか、顔を出し

いちか 飲む？お茶。

凜太郎 ! (シツとやる)

いちか え、

凜太郎、そっとふすまを閉め、

いちかに近づいて小声。

凜太郎 : じゃない。

いちか え？

凜太郎 ち、ちーちゃんじゃない。

いちか 何。

凜太郎 あの、知らない人。

いちか ええ？

凜太郎 寝てる。

いちか 知らない人。

凜太郎 男の人。

いちか えっ、男、

凜太郎 どうしよう。

いちか え、ちよ、待って

いちか、ふすまを開ける。

静止。何かを考えている。

凜太郎 警察、

いちか いやいやいやちよっと待って

いちか、ふすまを閉める。

凜太郎 どどどうしよう。

いちか 違う、待って。大丈夫。

凜太郎 大丈夫って、

いちか あれだよ。

凜太郎 どれ。何。

いちか えつと…

凜太郎 ねえ何。言ってよ。何。どれ。

いちか 彼氏。

凜太郎 …彼氏？

いちか 彼氏。

凜太郎 ちーちゃんのもの？

いちか いたんだね。

凜太郎 え、本当？

いちか うん。なんか、分かる。

凜太郎 嘘。

いちか 分かる。自信ある。

凜太郎 でも、

いちか 凜ちゃん！

凜太郎 はい！

見つめ合う二人。

いちか 私が自信ある時、間違ってたことある？

凜太郎 へ。

いちか ないよね。

凜太郎 うん。ない。

いちか ね。そういうこと。

凜太郎 うん。そっか。

なぜか納得する凜太郎。

二人。とりあえず座る。

凜太郎 彼氏…

いちか 何。

凜太郎 なんか、シヨック。

いちか なんで。おめでたい。

凜太郎 ちーちゃんはずっとこの家にいると思った。

いちか いるじゃん。

凜太郎 今はね。けど。もし結婚するってなったら。

いちか はは。結婚って。

凜太郎 あるかもしれないよ。

いちか 結婚願望無さそうだけどなあ。

凜太郎 そういう人の方がいざとなったら決断早いんだよ。

いちか そうなの。

凜太郎 「今だ」って思うんだって。

いちか 聞いたような口振りだ。

凜太郎 まあ。

いちか 誰。

凜太郎 別に誰でもないけど。

いちか あ、分かった。好きな人？

無言で返す凜太郎。

いちか お。当たり前だ。結婚しちやっただ。

凜太郎 違うよ。

いちか 結婚してないの。

凜太郎 したよ。

いちか ほら、したんじゃない。

凜太郎 したけど、違うから。好きとかじゃないから。

いちか 結婚願望無さそうだからって放置してたら他の人に取られ

ちやっただ。

凜太郎 …

いちか ね。でしょ。

凜太郎 …

いちか 誰だれ。私知ってる人？

凜太郎 …知らない人。

いちか 職場の人。

凜太郎 まあ。

いちか 同期？

凜太郎 先輩。

いちか へえ。年上か。いいね。

凜太郎 何がいいの。

いちか いいじゃん。就職一年目で、会社の先輩に恋してさ。ドラマ

みたい。

凜太郎 だから恋じゃないって。

いちか 可愛い？写真とか無いの。

凜太郎 …あるけど。

いちか えー、見たい見たい。

凜太郎、スマホを操作して渡す。

いちか あれ。結婚式。

凜太郎 うん。

いちか これ、いつ。

凧太郎 先週。

いちか 最近じゃん。

凧太郎 六月予定だったのが、コロナで延期。

いちか あんた好きな子の結婚式行ったの。

凧太郎 新郎が同期だから。

いちか うわ。しかも同期に取られたのか。

凧太郎 取られたっていうか、

いちか へえ。やるなあ。

凧太郎 取られたんじゃないからね。

いちか 取られてんじゃない。先超されて。

凧太郎 もう。返してよ。

スマホを奪い取る凧太郎。

凧太郎 だつてさ。くつつくと思わないもん。

いちか ほう。

凧太郎 就職していきなり在宅勤務だよ。ミーティングもリモート

ですわねってなつて、

いちか ああ、そうなの。

凧太郎 そうだよ。そんなの。チャンスないじゃん。近づけないじゃん。

ん。仲良くなれないじゃん。

いちか それは新郎君も一緒でしょ。

凧太郎 え？

いちか 凧ちゃん同期なんですよ。採用一年目でさ、在宅でリモ

ートで。

凧太郎 うん。

いちか 条件は一緒じゃないの。

凧太郎 あれ。本当だ。

いちか コロナに負けず愛を育んだんだね。

凧太郎 どうやって。

いちか 知らんよ。

凧太郎 ずるい。何。どうやって。

いちか 実は会つてたとか。

凧太郎 えー。自肅なのに。

いちか 我満できなかったとか。

凧太郎 みんな我満してたのに。

いちか いや知らんけどさ。

凧太郎 駄目だよ。そんなのずるいよ。

いちか だから知らんって。私に言わないでよ。

??? 静かにしてほしい…

下手から男が這い出てくる。

凧太郎、飛び跳ねて

凜太郎 ひい！ゾンビ！

いちか やつと起きた。

凜太郎 え？彼氏！？怖い怖い怖い！

いちか 違う。お姉ちゃん。

凜太郎 へ。

いちか なんで分かんないの。よく見て。

凜太郎、千尋？の顔をよく見る。

体を半分出したところで力尽きた千尋。

いちか ちよつと。こんなところで寝ないでよ。(千尋の頭をはたく)

千尋 く(何か言っている)

凜太郎 ちーちゃんだ！

いちか ね。

凜太郎 「ね」じゃないって。さっき彼氏って言ってたじゃん！

いちか 嘘に決まってんじゃない。

凜太郎 嘘。

いちか 気付かないんだもんあんた。どうみてもお姉ちゃんなのに。

凜太郎 どうみても他人でしょ。何、この格好。

いちか コスプレ。

凜太郎 は？

いちか でしょ。それサスケでしょ。お姉ちゃん。

千尋 く(何か言っている)

いちか ほら。サスケだ。写輪眼の。

凜太郎 コスプレ？

いちか 昨日イベントだったらしいから。

凜太郎 え。行つたの。

いちか オンラインイベント。世界のコスプレイヤーとオンライン

飲み会。どうせ朝方まで起きてたんですよ。

凜太郎 なんでそんなこといっちゃんが知ってるの。

いちか だって昨日つぶやいてたもん。

凜太郎 またツイッター！また俺だけ仲間外れにして、

突然すつと立ち上がる千尋。

二人の視線をしっかりと浴びる。

いちか 覚醒した…

凜太郎 すごい服…だね…

千尋 え。なにコレ。

いちか おはよう。

凜太郎 おはよう。

千尋 なんて居るの二人。

いちか 今日十時集合でしょ。

千尋 いちか東京は。

いちか だから帰って来たんだって。

凜太郎 うわ。ちーちゃん何その目！

千尋 へ？

いちか だから写輪眼だって。カラコン。

凜太郎 カラコン？すげえ…（ちひろの顔を覗き込む）

千尋 あ！うわ、

逃げるように部屋に戻る千尋。

凜太郎 ちーちゃん？

いちか 秘密の趣味らしいから。

凜太郎 コスプレ？

いちか 一応ね。

凜太郎 母さんにも秘密なの。

いちか 知らないことになってる。知ってるだろうけど。

凜太郎 別に隠さなくていいのに。

千尋の部屋から物音がする。騒がしい。

凜太郎 楽しそう。

いちか ん？

凜太郎 良かった。ちーちゃん。元気そう。

いちか うん。元気だよ。

凜太郎 うん。

いちか でも働く気無いよあれ。

凜太郎 はは。

いちか 元気なニート。

凜太郎 いいじゃん。

いちか 良くないよ。どうするの。

凜太郎 どうって。

いちか だっぴすつとこのままってわけにいかないよ。働かないと。

凜太郎 いいでしょ。しばらくは。

いちか しばらくたって…

凜太郎 生き生きしてる。

いちか そりゃ好きなことだけしてたら生き生きするよ。

凜太郎 俺も辞めようかなあ。

いちか は？

凜太郎 ちーちゃんみたいに好きなことして暮らそうかなあ。

いちか なんで。せつかくあんな大企業就職できたのに。

凜太郎 …

いちか 嫌なの仕事。

千尋 嫌なの仕事。

千尋が出てくる。

凧太郎 あれ。着替えた。

いちか そのままでいいのに。

千尋 駄目だよ。ばあちゃんびつくりしちゃう。

凧太郎 そんな趣味あったんだね。

千尋 始めたばかりだよ。

凧太郎 ふうん。

千尋 私、仕事辞めてね。

凧太郎 うん。いっちゃんから聞いた。

いちか あ、こら。

千尋 いいよ。隠してたわけじゃない。言うタイミング無くてね。

いちか 凧ちゃん帰ってこないからでしょ。

千尋 うん。

いちか ほら。

凧太郎 ごめんって。

千尋 でも今で良かったっていうか。辞めたばかりの時は、

なんていうか…

いちか やばかったもんねほんと。

凧太郎 そうなの。

いちか 電話しててもき、ほとんど声聞こえないの。

凧太郎 ええ。

いちか ほっといたら消えて無くなっちゃいそうな感じでき。正直、

自殺とか…怖いぐらい。

千尋 ごめんね。

いちか 謝らなくてもいいけどさ。

凧太郎 ごめん。

いちか いや。なんであんたが、

凧太郎 だって俺、何も知らなくて…

千尋 ううん。それは、

凧太郎 もっと会いに来れば良かった。来れたのに俺、

千尋 気にしないで。それは、いいんだよ。

凧太郎 …

千尋 心配してくれるのはありがたいことだけど…申し訳ない

気持ちもあるから。

凧太郎 そうなの。

千尋 それで気が重くなっちゃうこともあるから。だから、

いい。

いちか そういうもんか。

凧太郎 そっか…

間。

千尋 あ。

凜太郎 え。

千尋 お茶飲む？

凜太郎 あ。うん。

いちか あ、いいよ。私する。

千尋 いいの。

いちか やるやる。凜太郎、準備してよ。そろそろでしょ。

施設の人に連絡したりしないといけないんですよ。

凜太郎 あ。うん。

いちか、上手へ。

千尋、下手へ。

凜太郎 ちーちゃん。

千尋 (声) ん？

凜太郎 仕事のこと聞いてもいい？

千尋 (声) 前の？いいよ。

凜太郎 一緒に働いてた人のこと。

千尋、パソコンを持って出てくる。

千尋 なんか要る？
凜太郎 え？

千尋 なんか。機材っていうか。

凜太郎 ああ。これ(スマホ)でいいかなって。

千尋 ええ。小さくない？

凜太郎 そう？

千尋 私パソコン持つてるよ。使う？

凜太郎 いいの？

千尋 いいよいいよ。待ってて。

凜太郎 あ、ありがとう。

千尋 えっと、ここでいい？

凜太郎 うん。

千尋、パソコンを床に置く。

千尋 仕事のこと。

凜太郎 うん。仕事できない人、いたって。

千尋 できない人？

凜太郎 いつも同じことで上の人に怒られて、その怒られてる声で病んだって。

千尋 ああ。いちかに聞いたんだ。

凜太郎 そんなに駄目な人だったの。

千尋 ー…

凜太郎 あ。言いたくなかったらいいけど。

千尋 ううん。大丈夫。

千尋、少し考え

千尋 中内君っていつてね。

凜太郎 中内君。

千尋 少しね。手が遅いところがあつて。

凜太郎 うん。

千尋 普通にしても人より時間かかるのに、言われたこと全部、全力でかかっちゃう子で。

凜太郎 全力で。

千尋 うん。真面目すぎるっていうか…手の抜き方が分からない

かっただのかな。一個ずつちゃんとやるの。何日もかけて。

凜太郎 うん。

千尋 せっかちな上司だったし。見えてイライラしたんだろうね。

凜太郎 毎日怒って。

千尋 うん。ほんと毎日。聞いてられなかった。最後の方なんか人格否定ばかりだったし。ひどい言われようでね。

凜太郎 しんどいね…

千尋 あのね。一番辛かったのは、

と、いちか、戻っている。

千尋 笑うんだよ。中内君。

凜太郎 え？

千尋 笑うの。笑ってるのずっと。

いちか 笑ってる？

千尋 毎日あんなに怒られて。いっぱい頑張ってるのに伝わらなくてね。なのに笑う。

凜太郎 どうして。

いちか 意外と平気だったんじゃないの。

千尋 ううん。無理して笑ってた。

凜太郎 そうなの。

千尋 不器用な子だから上手く笑えない。隠そうとして笑ってる

って誰でも分かる。

いちか ふうん…

千尋 みんな分かった。分かったけど。何もできなくて。

凜太郎 うん。

千尋 で、私が先に潰れちゃった。はは。

凜太郎 …

二人、返す言葉を探している。

千尋 必要な人だったよ。

凜太郎 え。

千尋 中内君。

いちか 仕事できないの？

千尋 まあ、業績はあんまりだったけど。

凜太郎 必要って。

千尋 中内君って誰にでも優しくくてね。

凜太郎 優しい。

いちか それだけ？

千尋 だって…すごいことだよ。誰にでも分け隔てなく。

なかなかできないよ。

凜太郎 うん。

千尋 嬉しかった。髪型とか変えたらすぐ気付いてくれるんだよ。

いちか ほう。

千尋 一緒に残業してたら、危ないからって帰り送ってくれたり。

凜太郎 ほう…？

千尋 すごいんだよ。私の好きなお菓子とかジュースとか覚えて

ね、しょっちゅう差し入れてくれて。そういう記憶力は

あるんですよってよく話してて、

いちか ちよ、ちよっと待って。

千尋 え？

いちか それさ。それってさ。

千尋 何。

いちか ただ、好かれてる…

千尋 へ。

いちか だけじゃない？

凜太郎 うん。

時間をかけて言葉を理解する千尋。

千尋 私が？

いちか うん。

千尋 中内君に？

凧太郎 うん。

千尋 嘘。

いちか いや、多分そう。

千尋 そうなの。

凧太郎 うん。俺もそう思う。

千尋 嘘。

いちか いや…ねえ。(凧太郎を見る)

凧太郎 いや…ねえ。(いちかを見る)

千尋 …まじか…

長めの沈黙が流れる。

いちか …はは。まあ。

凧太郎 あ、はは。ね。

千尋 え。

いちか なんかよく分かんないけど、良かったね。

凧太郎 うん。良かった良かった。

千尋 良かったの？

いちか いやもう、結果的には。なんかすごお、良かった。

凧太郎 うん。俺ももう、なんかどうでも良くなったっていうか。

千尋 え。いいのそれで。

いちか あ！

千尋 えっ

いちか 忘れてた。

いちか、お茶を配る。

三人、お茶をすすって一息。

いちか はあ。なんか、いいね二人とも。

凧太郎 何が。

いちか 好きとか好かれてるとかあつてさ。

千尋 え、凧ちゃんも。

凧太郎 いや俺は、

いちか あるよ。あるじゃん。いるじゃん。好きな人。

凧太郎 まあ…もう無理だけど…

千尋 いちかは。彼氏いないの。

いちか いない。

千尋 好きな人とか。

いちか いない。

凧太郎 いないんだ。

いちか いない。つまんない。

凧太郎 タイショー君は。

いちか なんでそこで大将君。

凧太郎 いや他に知らないし。

千尋 誰？たいしよう君って。

凧太郎 トイレのスリッパで家中歩く人。

千尋 え。ありえない。

いちか でしょー。ありえないよね。

凧太郎 俺それ分かんないんだけど。

いちか え。汚いよ。

凧太郎 そもそもうちのトイレ、スリッパないんだけど。

いちか えー。

千尋 えー。

凧太郎 ええ？

着信音。

三人、それぞれ自分のスマホを確認する。

いちか あ、お母さんだ。

凧太郎 うわ。もう時間じゃん。

千尋 わ、ほんとだ。

凧太郎 ちーちゃんパソコン借りるね。

千尋 うんうん。

いちか もしもし。…うん、着いてるけど。何してんの。

いちか、電話しながら上手にハケる。

パソコンを操作する凧太郎。

千尋は周囲を片付けている。

凧太郎 あ、そうだ。ちーちゃんそのチャリどうしたらいい。

千尋 え、置いとけばいいよ。

凧太郎 どうして。邪魔でしょう。

千尋 今日のために持って上がったの

凧太郎 何なの、これ。誰のチャリ。

千尋 お母さんの。

凧太郎 母さんチャリ持ってたんだ。

千尋 お嫁に行く時にばあちゃんが買ってくれたんだって。

凧太郎 チャリ？

千尋 ばあちゃんの妹が自転車屋さんだったからって。

凧太郎 おお、そうなのか。

千尋 壊れてるらしいけど。

凧太郎 えっ、

千尋 パンクしてるし。無くなってる部品もあつて。ブレーキも効かないかもつて言つてた。

凧太郎 なのにまだ持つてるの。

千尋 うん。

凧太郎 乗れないのに。

千尋 車あるしね。必要ない。

凧太郎 なら、どうして。

いちか、戻ってくる。

いちか お母さんもうすぐ着くつて。先に始めとこ。

凧太郎 これ母さんのなんだつて。

いちか え、チャリ持つてたんだ。

凧太郎 ね。知らなかつたね。

千尋 捨てて、ばあちゃんに何かあつたら嫌だから持つてる。

凧太郎 何かつて。

千尋 まあ。ゲン担ぎだよ。

いちか ゲン担ぎ。

千尋 ばあちゃんが元気でいてくれますようにつてこと。

凧太郎 おおー。

いちか 部屋に入れる意味が分かんないんだけど。

千尋 だから。ばあちゃんに見せようと思つて。

いちか チャリを？

千尋 だつてオンラインじゃなきゃ見せてあげられないよ。

老人ホームに持つていくわけにもいかなひしさあ。

いちか そもそもこんなの見て喜ぶかなあ…

凧太郎 まあ。ちようどいいじゃん。背景にしよう。

いちか 背景？

凧太郎 ZOOMといえバ―チャル背景でしょ。

千尋 ふふ。これはリアル背景だね。

凧太郎 あ、本当だ。(笑う)

いちか えー。ほんとに置くの？狭いのに、

凧太郎 いいからいいから。

凧太郎、自転車を配置し、それが写る位置にパソコンを置く。

いちか (覗き込み) あ。

凧太郎 ね。

千尋 うん。いい感じ。

いちか いやいや。すごいシユール。

凧太郎 チャリと孫(笑う)

千尋　チャリと孫（笑う）
いちか　いいけどさ…
千尋　あ、ほら。座って座って。

三人、座る。

凜太郎　全員写ってる？
いちか　お姉ちゃんもつとこつち。
千尋　あ、うん。
いちか　お母さん入るとこ空けといてね。
凜太郎　あれ。間に合う？母さん。
いちか　だからもうすぐ着くつてば。
千尋　もう施設とつながってるの。
凜太郎　アプリは落としてあるから。あとID入れたらいけるはず。
（と、操作している）
千尋　すごいね。オンライン面会。
いちか　なんでもオンラインになっちゃったね。
凜太郎　ばあちゃんチャリのこと覚えてるかな。
千尋　覚えてたらすごいよ。
いちか　絶対忘れてるつて。
凜太郎　忘れてても話のネタになるね。

千尋　ふふ。そうだね。
凜太郎　あ、つながった。

三人、黙る。画面を見つめる。

凜太郎　おはようございます。…はい。…はい。大丈夫です。あ、

三人、画面に注目する。

そして、笑顔。

そして、幕。

おしまい